

# 世界のデータから

統計データなどをもとに、ジェンダーギャップに対する世界の人々の意識と、日本の現状を考えます。

今回は、ジェンダーやセクシュアリティについて都留文科大学で教鞭を執っておられる加藤めぐみ先生にうかがいました。

## ジェンダーギャップ指数 日韓逆転の背景

——#MeToo 運動と『82年生まれ、キム・ジョン』

都留文科大学文学部英文学科教授  
加藤めぐみ

### ■東アジアのジェンダーギャップ指数

世界経済フォーラムが2019年12月に発表したジェンダーギャップ指数（Gender Gap Index）で、日本は前年の110/149位から121/153位になり、G7のなかで最下位にランクされました。（その内容分析については2020年春発行の本誌64号をご参照ください。）コロナ禍の影響で最新の指数の発表が遅れていますが、昨今の国内のジェンダーをめぐる議論を鑑みても日本の現状が世界的に評価されるのは難しくそうです。とはいえジェンダー平等で世界から後れを取っている！と焦ってばかりもいられません。今後、日本はアイスランドや北欧諸国などの社会のあり方——充実した育児支援や女性の政治参加——を見習いつつ、数値目標を掲げ、制度を整えることも大切ですが、日本的な価値観を否定することなく、男女両性が自分らしく生きていくにはどうしたらいいか、それぞれに考えていく必要があるでしょう。

そこで本稿では、そのヒントとして前年の115位から108位にランクアップした韓国の社会の変化に目を向け、東アジアにおけるジェンダー問題改善の可能性を探ってみたいと思います。経済的には目覚ましい発展を遂げているのにジェンダー意識は保守的とされてきた日韓両国ですが、いま韓国では何が起きているのでしょうか。韓国で2016年に起きた江南駅通り魔事件、および同年出版され、130万部を突破したベストセラー『82年生まれ、キム・ジョン』が巻き起こした社会現象を取り上げ、日韓のジェンダーギャップ指数のランクが逆転した背景をご紹介します。

### ■#MeToo 運動の影響力——韓国フェミニズムの動向

2016年5月17日午前1時、ソウルの繁華街・江南駅<sup>カンナム</sup>近の商業施設で痛ましい事件が起きました。30代男性が女子トイレに忍び込み、偶然そこにいた23歳の女性を凶器で殺害。犯人は殺害動機として「日頃から女性を恨んでいた。

ジェンダーギャップ指数（2018） 上位国及び主な国の順位		
順位	国名	値
1	アイスランド	0.858
2	ノルウェー	0.835
3	スウェーデン	0.822
4	フィンランド	0.821
5	ニカラグア	0.809
6	ルワンダ	0.804
7	ニュージーランド	0.801
8	フィリピン	0.799
9	アイルランド	0.796
10	ナミビア	0.789
12	フランス	0.779
14	ドイツ	0.776
15	英国	0.774
16	カナダ	0.771
51	米国	0.720
70	イタリア	0.706
75	ロシア	0.701
103	中国	0.673
110	日本	0.662
115	韓国	0.657

女性たちが自分を無視してきたから」と供述したそうです。事件発生直後、まずはSNS上で犠牲者に対する追悼集会が呼びかけられ、その後、この悲劇の背後にあると考えられる韓国社会の「ミソジニー（misogyny）」に対する女性たちの怒りに火がつかしました。ミソジニーとは「女性嫌悪・女性蔑視」のことで「女性全般を、女性であるというそれだけの理由で嫌悪する感情」を示します。男性優位社会の基底にはこの女性嫌悪があるとされています。

それまで韓国のフェミニズムは一部の女性団体がすすめる「運動」とされてきましたが、この事件をきっかけに一人一人の女性たちが声をあげ、女であるというだけで受けた悲しみ、屈辱、絶望、人生の困難など、自らの経験を語りはじめました。そうして2017年、文在寅大統領<sup>イン・ジョンミン</sup>就任前後にはハリウッドから始まった#MeToo運動が本家アメリカを超える破壊力を持って、韓国の権力中枢に大打撃を与えました。大統領候補は政治生命を断たれ、ノーベル賞候補の呼び名も高かった詩人の作品が教科書から削除され、人気俳優は命を絶ちました。それまで権力の座にあぐらをかいていた人々が告発を恐れ、発言や活動を控えるようになったのです。

### ■『82年生まれ、キム・ジョン』

そんな気運のなか、チョ・ナムジュ著の『82年生まれ、キム・ジョン』はまさに韓国の普通の女性たちの積年の想いを代弁する物語として多くの読者の心を捉えました。この作品は韓国社会における過去から現在に至る女性差別の実態を告発したのですが、女性の権利の要求が声高に叫ばれるわけではありません。タイトルのキム・ジョンという名前が1982年に韓国で生まれた女兒につけられた最もポピュラーな名前であることから、物語の主人公がごく普通の女性であることが示唆されます。そこで誰もが経験しうる身近なこと、誕生

ジェンダーギャップ指数 (2020) 上位国及び主な国の順位		
順位	国名	値
1	アイスランド	0.877
2	ノルウェー	0.842
3	フィンランド	0.832
4	スウェーデン	0.820
5	ニカラグア	0.804
6	ニュージーランド	0.799
7	アイルランド	0.798
8	スペイン	0.795
9	ルワンダ	0.791
10	ドイツ	0.787
15	フランス	0.781
19	カナダ	0.772
21	英国	0.767
53	米国	0.724
76	イタリア	0.707
81	ロシア	0.706
106	中国	0.676
108	韓国	0.672
121	日本	0.652

から学生時代、受験、就職、結婚、育児までが綴られているのです。著者が放送作家であったこともあり、小説らしくない文芸とジャーナリズムの間にあるような作品で、途中に統計データや歴史的背景の説明が挿入されているという読みやすさも人気の鍵です。さらにこの作品は2019年に映画化され、2020年日本でも公開。まもなくDVDが発売されます。

韓国の伝統社会における女性の抑圧は、キム・ジヨンの世代だけでなく祖母、母の体験としても語られます。ジヨンの母オ・ミンクは二人の娘を産んだとき「お義母さん、申し訳ありません」と謝り、三人目の女の子を中絶します。きっかけは「次も女の子だったらどうするか」との問いに夫が「縁起でもないことを言わないで、さっさと寝ろ」と答えた一言でした。90年代初頭、韓国では出生における男女比の歪みが社会問題になり、政府は胎児の性別判断を法的に禁じましたが、効果はなかったとされています。生まれること自体も否定されてしまったキム・ジヨンの妹。中絶から4年後に生まれた弟は家族に溺愛されます。ほんの一世代前に韓国でいかに女性が蔑まれていたかがよくわかるエピソードです。

#### ■ジェンダーギャップ指数の日韓逆転の背景

江南通り魔事件を機に女性たちがそれまで抑圧されていた「声」を上げはじめ、『82年生まれ、キム・ジヨン』に多くの人々が「わたしの物語だ」と共感し、性暴力などの日常の生きづらさと政治との関わりへの意識が高まりを見せた韓国。フェミニストやフェミニズムという言葉さえ使われることが憚られていた社会の空気が大きく変化しはじめたことが追い風となり、2017年に就任した文大統領が「フェミニスト大統領」を名乗り「女性閣僚を3割にする」と公約を掲げました。そして、就任時、過去最大となる5人の女性閣僚を起用した結果、「経済」「政治」「教育」「健康」の4分野のうち「政治」

分野のスコアが119位から73位への跳ね上がり、冒頭で紹介したとおり日本は110位から121位、韓国は115位から108位へ、とジェンダーギャップ指数の日韓のランクが逆転をしたのです。その後も韓国は女性閣僚や議員の割合を増やすため議員制度のクォータ（割り当て）制を導入するなどの努力を続けていますが、足踏みが続いているというのが現状のようです。

#### ■日本でいま、できること

韓国の例からもわかるように、政府のトップの政治的な決断でジェンダーギャップ指数を多少、向上させることは可能でしょう。しかしその決断も国民一人一人のジェンダー意識の高まりや世論の大きな支えがあってこそ実現するのです。わたしが教えている「ジェンダー&セクシュアリティ」の授業では、いつも初回の冒頭で学生たちに「あなたはフェミニストですか」という問いを投げかけます。すると回答のうちYES/NOの割合は四分六分。NOと答える学生の多くはフェミニズムという言葉の意味がわからなかったり、偏見を持っていたりして、自分がフェミニストであると認めることに抵抗を感じているようです。そこでわたしから「フェミニスト」というのは自分が女性であること、男性であることで生じる「生きづらさ」を自覚できる人のこと、と説明し、これまでに感じてきたジェンダーによる違和感を言葉にしてもらいます。すると「両親はともに教師なのに母親ばかりが家事をしている」「就活で同じ仕事なのに男性なら正規雇用、女性は非正規と言われた」などと日常的に経験している不合理が次々に自覚されてきます。さらにフェミニズムの歴史や文学、映画作品、そして#MeToo運動やフラワーデモなどの卑近なニュースや出来事から「ジェンダー」や「セクシュアリティ」に関する問題を学ぶことで、授業の最終回には受講生の8割以上が男女ともに「自分はフェミニスト」と言えるようになるのです。若い世代のジェンダー意識の高まりで日本もゆっくりにてはありますが、確実に変わっていると感じています。

#### ■参考文献

- イ・ミンギョン『私たちにはことばが必要だ——フェミニストは黙らない』すみ・小山内園子訳（タバックス、2018年）  
 キム・スヒョン『私は私のままで生きることにした』（ワニブックス、2019年）  
 斎藤真理子責任編集『韓国・フェミニズム・日本』（河出書房新社、2019年）  
 申琪榮（シン・キヨン）「ジェンダーギャップ、韓国108位日本を逆転したわけ」聞き手・岡林佐和（朝日新聞DIGITAL 2019年12月18日）  
 チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジヨン』斎藤真理子訳（筑摩書房、2018年）

※表はそれぞれ内閣府発行「共同参画」平成31年1月号及び令和2年3・4月号を基に作成